

(ロ)研究業績

A. 業績一覧

I. 著書

【単著】

- ①『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館、1994年(学位論文)。
- ②『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001年(2000年度・科研費出版助成・全国図書館協議会選定図書)。
- ③『ホロコーストの力学ー独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法ー』青木書店、2003年。

【編著】

永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史-背景・論理・展望-』日本経済評論社、2004年(1999-2001年度科研費(A) 国際学術調査「ヨーロッパ統合の社会史の比較研究」の成果報告：2003年度・科研費助成出版)。pp. 1-16, 65-102, およびケルブレ担当の第1章翻訳。共著者は、編者二人、ケルブレのほか、小野塚知二(東京大学教授)、バンジャマン・コリア(パリ第13大学教授)、アルベルト・メルレル(イタリア、サッサリ大学教授)、雨宮昭彦(千葉大学教授…当時)、新原道信(横浜市立大学助教授…当時)。

【共著①】

井上茂子・木畑和子・芝健介・永岑三千輝・矢野久『1939 ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』同文館、1989年。担当は、序章 ドイツ第三帝国史研究の現在：政治と経済、国家と経済 pp. 19-31. 第3章 第三帝国のフランス占領とドイツ経済界 pp. 151-198.

【共著②(担当章の執筆)】

- ①遠藤輝明編『国家と経済ーフランス・ディリジズムの研究ー』東京大学出版会、1982年(1981年度・科研費出版助成)。(共著者：権上康男、廣田明、廣田功、大森弘喜、原輝史、秋元英一、永岑三千輝)
担当章「第三帝国における国家と経済ーヒトラーの思想構造にそくしてー」pp. 385-437.
- ②立正大学西洋史研究室『政治と思想ー村瀬興雄先生古稀記念西洋史研究論叢』1983年
担当章「第三帝国における国家と経済ー化学工業独占体イ・ゲ・ファルベン社とオーストリア併合」pp.85-119.
- ③廣田功・奥田央・大沢真理編『転換期における資本・労働・国家-両大戦間の比較史的

- 研究-』東京大学出版会、1988年。
- 担当章「第三帝国チェコスロヴァキア共和国解体とイ・ゲ・ファルベン」pp. 123-151.
- ④遠藤輝明編『地域と国家—フランス・レジオナリズムの研究—』日本経済評論社、1992年(科研費出版助成)。
- 担当章「地域・民族・国家—両大戦間のズデーデン問題—」pp. 273-319.
- ⑤社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、1992年。
- 廣田功との共著:ヨーロッパの戦後改革—フランスとドイツ—、そのうちドイツを分担。
Pp.328-334.
- ⑥西川正雄編『自国史を越えた歴史教育』三省堂、1992年。
- 担当章「ドイツ=ポーランドの対話」(二)pp. 192-207
- ⑦権上康男・廣田明・大森弘喜編『20世紀資本主義の生成—自由と組織化』東京大学出版会、1996年。
- 担当章「ナチ体制下の戦後構想とドイツ資本主義の組織化」pp. 313-342
- ⑧廣田功・森建資編『戦後再建期のヨーロッパ経済—復興から統合へ—』日本経済評論社、1998年。
- 担当章「ドイツ戦後再建の人的社会的基礎」pp. 55-95.
- ⑨Wolfgang Klenner/Hisashi Watanabe(Hrsg.), *Globalization and Regional Dynamics. East Asia and The European Union from the Japanese and the German Perspective*, Heidelberg 2002.
- 担当: The Strategies of the Japanese Government and Trade Associations pp. 43-49.

【翻訳書(共訳・監訳・単独訳)】

- ①ハルトムート・ケルブレ著・雨宮昭彦・金子邦子・永岑三千輝・古内博行訳『ひとつのヨーロッパへの道—その社会史的考察—』日本経済評論社、1997年(第2刷, 1998年)
- ②ウォルター・ラカー編・井上茂子・木畑和子・芝健介・長田浩彰・永岑三千輝・原田一美・望田幸男訳『ホロコースト大事典』柏書房、2003年。
- ③ハルトムート・ケルブレ著・永岑三千輝監訳・金子公彦・瀧川貴利・赤松康史訳『ヨーロッパ社会史—1945年から現在まで—』日本経済評論社、2010年3月刊(ゲーテ・インスティテュート、横浜学術教育財団、およびベルリン・フンボルト大学特別研究領域の出版助成を得た)。
- ④ハルトムート・ケルブレ「1945年以降の独仏の社会関係」(永岑訳) 廣田功編『欧州統合の半世紀と東アジア共同体』日本経済評論社、2009年、pp. 15-36.
- ⑤ウルリッヒ・ヘルベルト「「ホロコースト研究の歴史と現在」『横浜市立大学論叢』第53巻、社会科学系列、第1号、2002年、pp.127-164.

【教科書（担当章・節の執筆）】

- ① 松田智雄編『西洋経済史』青林書院新社、1982年（項目執筆「ナチス経済」）。（共著者は、遠藤輝明、関口尚志、弓削達、住谷一彦、鈴木圭介、楠井敏朗、柳澤治、廣田功、秋元英一、梅津順一ほか）。
- ② 歴史科学者協議会編『卒業論文を書く－テーマ設定と資料の扱い－』山川出版社、1997年（2004年に第三刷）（担当：「ヒトラーナチスと第三帝国の権力」）
- ③ 経営史学会編『外国経営史の基礎知識』有斐閣、2005年（ナチス期の戦後構想から「経済の奇跡」）
- ④ 上杉忍・山根徹也編『大学生のための世界史講義－構造的把握を中心に－』（仮書名）、山川出版社、2010年7月刊予定。

担当章：第7章 第一次世界大戦とロシア革命、および、第8章 ファシズムと第二次世界大戦

B. 要旨・・・主要研究業績【単著】3点の要旨(各2000字以内)

(1) 『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館、1994年(学位論文)。

本書執筆の前提となった諸論考は、ポーランド侵攻からフランス占領までの電撃戦勝利の段階に、第三帝国が行ったヨーロッパ占領政策の研究であった。そのエッセンスを1990年6月の日ソ歴史学シンポジウム(モスクワで開催、日本派遣団の長は和田春樹・東大社会科学研究所教授)で報告した。しかし、会場の雰囲気はどこかしら頼りなげであり、活発なものではなかった。帰国後、2か月足らずのうちに、ソ連が崩壊した。

ソ連崩壊で世界的に噴出したのは、「西側勝利」の大合唱であった。しかし、物事はそう単純か、メディアに支配的な論調に対する根本的批判意識が強くなった。

第二次大戦後、世界を二分する巨大な国家となったソ連が、そもそも誕生した諸要因、そのソ連が発達し強化された諸要因、そして第二次大戦後、数十年で崩壊するにいたった諸要因、これらを総合的立体的にとらえてこそ、すなわち巨大な体制の生成・発展・没落の全過程をとらえてこそ、現在の世界と歴史を理解したことになるのではないか。

そうした問題意識にたつとき、ソ連の世界強国への飛躍において、独ソ戦とそれに対する勝利こそが決定的意味をもつのであり、この問題を真正面から見る必要があると考えた。それまでの電撃戦勝利段階の実証段階にとどまることはできなかった。

そこで、我が国ドイツ史(西洋史)研究において未解明の戦時期の諸問題のうち、東方大帝国・世界強国をめざすヒトラー・ドイツ第三帝国のソ連占領政策の問題を解明することに全力を傾注した。

東方大帝国建設の戦争政策・占領地支配政策の総体の中に、ユダヤ人大量虐殺の問題を位置づけ、世界大戦の経過、ドイツ第三帝国の最初の軍事的危機、「冬の危機」、それにつぐ軍事的劣勢化と治安秩序維持の危機と関連させて把握した。またそうすべきことを実証的に主張した。

こうした歴史理解のひとつの決定的刺激は、まさに日ソ歴史学シンポジウムでモスクワに行き、チェレメチェボ空港から市内にはいる途中の私にとっての衝撃的経験、「歴史発見」があった。バスの中で、ソ連アカデミーの出迎えの人が、指差して戦勝記念の巨大な鉄塔に注意を喚起した。「あそこでドイツ軍を食い止めた」と。それは、一方では350万のドイツ国防軍の大軍が「よくぞここまで」侵攻してきた、と感じさせるものであった。しかし、他方では、「よくぞここからソ連軍・モスクワ市民は反撃に転じた」と感じさせるものであった。二つ大国、一方のヒトラー・ドイツの侵略を必然化させた諸要因と、他方でのその侵略を200万とも270万ともされる犠牲の上に、その犠牲をものともせず撃

退したソ連、この相互関係をこそ、20世紀世界史、20世紀の世界の政治経済史、現代世界の到達した地平を考える不可欠の要素であると考え、できるかぎりでそれを証明しようとした。

(2) 『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001年。

前著（学位論文）のテーマをより豊富な一次史料に基づいて実証的に明らかにした。時期的にも、前著の1941-42年のせまさを乗り越え、1944年—45年の諸問題にまで実証的解明を進めた。それは、1993年の半年間のドイツ連邦文書館（コブレンツ）での研究留学の機会にアクセスできたドイツの占領諸機関の文書によるものであった。

とくに治安警察機構の秘密文書類が重要な素材となった。前著で確立した方法意識の上に、ホロコーストの歴史的な理解において独ソ戦の展開が持つ決定的重要性を実証した。すなわち、独ソ戦の長期化・泥沼化、さらに敗退過程と世界大戦による劣勢の状況、絶望的な状態のなかで、権力関係では弱い立場にあるユダヤ人へのホロコーストが展開した。

経済的・治安秩序的な諸条件と占領地の民衆および本国の民衆を統合する必要から、治安当局の攻撃的がマイノリティとしてのユダヤ人に絞られる。危機の深刻化の段階・状況・場に応じて、ユダヤ人抹殺が進む。

ホロコーストの主体的推進者・機関は、総統ヒトラー、親衛隊最高指導者・ドイツ警察長官ヒムラー、その直属の部下・帝国保安本部長官ハイドリヒとその治安警察機構であった。この中心的推進主体・諸機関の秘密文書を読み解くことで、ユダヤ人殺戮の論理と力学を解明した。すなわち、帝国(ライヒ)保安本部作成「事件通報ソ連」、ゲシュタポの「国家警察重要事件通報」、ヒムラー個人参謀部文書(ドイツ連邦文書館 NS19)などを主として利用しつつ、独ソ戦の現場が引き起こすマイノリティ・ユダヤ人殺戮の必然性を追跡した。

(3) 『ホロコーストの力学—独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法—』青木書店、2003年。

文芸春秋社・若者向け月刊誌『マルコ・ポーロ』に、「ナチ・ガス室はなかった」とのアウシュヴィッツ否定論が1995年2月号に掲載された。欧米ではそうした否定論は戦後すぐから執拗に繰り返された。ドイツをはじめとするヨーロッパではそうした言説・宣伝は、

言論の自由の埒外に置かれ、非合法化された。繰り返される否定論は、刑事告発され、有罪判決が繰り返された。「修正主義」を標榜する否定論は、そうしたヨーロッパから逃避して、特にアメリカにおける言論の自由を武器にアメリカ各地に拠点を築き、アメリカ発否定論が世界に広がっていた。

一見「科学的」な装いのそうした「修正主義」の否定論に、我が国の歴史研究の「素人」が引っ掛かった。その人物は、極右・人種主義者たちの流す言説を本物の「タブーの否定」の言説ととらえて、『マルコ・ポーロ』に投稿し、掲載された。しかし、それはただちに世界的批判を浴びた。月刊誌編集者の見識がとわれ、出版社の見識も問われた。この月刊誌はあっという間に廃刊された。「本当はどうなのか」という一般市民の疑問に、紙面が割かれることはなかった。

この事件を契機として、歴史学研究会、戦争責任研究センターなどでのシンポジウムで報告することになった。そして論文をまとめた。この95年以降の既発表論文(『戦争責任研究』、『現代史研究』、『横浜市大論叢』などに掲載)をもとに、ドイツの文書館での史料発掘・検証を踏まえて、大幅に添削を施し、書下ろしの第7章を加え、2002年8月にドイツ短期出張中にコブレンツ文書館で書き上げたのが、本書である。

極悪非道な前代未聞の刑事犯に対しても、法廷は証拠資料を冷静入念に調査して、犯罪事実と刑の重さを確定する。事実と責任の所在をできるだけ正確に解明すること、その点で歴史的悲劇の研究においても同じスタンスが必要であろう。世界史的悲劇ホロコーストを対象とする場合にも、その悲劇から真の教訓を見出し、平和構築に活かすためには、その歴史現象をそれが発生した状況と場において、諸事実の内的連関をリアルに解明していく必要がある。ホロコーストの展開は、まさに、独ソ戦、世界大戦、総力戦とその敗退過程において行われたことであった。そのことを、ヒトラー命令をめぐる世界的な論争と日本での論争を踏まえて、検証した。

ホロコーストは、20世紀前半の巨大な諸国家・諸民族・諸政治潮流がぶつかり合う世界戦争の激烈な諸利害・諸要求のせめぎあいと闘いのダイナミックな発展的展開のなかにおいて(一言で言えば弁証法的展開において)、引き起こされた。

具体的検証対象には、ヒトラー絶滅命令の発布時期を巡る論争と証拠文書類をとりあげた。わが国で、ヒトラー命令41年8月説をとる栗原優が根拠としている諸文書を洗いなおし、41年12月説を再確認・実証した。

予防歴史学・建設と創造の歴史学としての方法的見地で、歴史・社会・人間における危

険な諸要因を解析し、21 世紀の世界を切り開いてきた危機克服の英知と勢力を認識し、立体的に総合する必要性を確認する。

ナチ国家指導部（ヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒ）のヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策への転換の決定的画期＝41 年 12 月説の見地。その後の展開は、世界大戦・総力戦の死闘・敗退局面のなかで先鋭化し徹底していくことを実証的に解明。

弱さの表現としての残虐さ！！ 占領支配の強さの表現ではなく、弱さと危機の表現としての残酷さ！！

ホロコーストは、「帝国」と人種主義的支配の原理的弱さの証明である。

裏返していえば、「共同体」と民主主義的連帯・融合の原理的強さの血による証明ともいえる。20 世紀後半以降の世界の支配的原理(反帝国主義・反植民地主義・民主主義)の獲得は、多大の血の犠牲の上になりたっていたということを、ホロコーストの論理と力学を解明することを通じて、再確認した。